

月31日、最優秀作品には賞金10万円が贈呈される。  
《郵送先・マンガ購入など問合せ先》〒318・01003  
高萩市大能341 長久保赤水顕彰会・マンガ『道知るべ  
く』續長久保赤水の一生』感想文係 090・1846・68  
49

## ユニークな写真集『浅田家』は映画『浅田家!』のモデルにもなった!

「家族」と「記念写真」をテーマに活動する写真家・浅田政志(1979年三重県生まれ)による作品を、制作の原点から最新作まで、本人の言葉とともに辿る最大規模の個展『浅田政志 だれかのベストアルバム』展が、水戸芸術館現代美術ギャラリーで開催されている。

2008年発表の『浅田家』以来、浅田は自身の家族を被写体に、自らも一緒に様々なシチュエーションを演じるセットアップ写真の手法で、時とともに変わる家族の様子を取り込みながら、作品制作を続けている。また、被写体として公募した家族と、撮影自体が「記念」となる作品も制作してきた。さらに、東日本大震災では津波に流された写真を洗浄するボランティア活動に携わり、その経験からアルバムを作り、そして残すことの大切さを伝える活動を行っている。

## 『ひと』ゴミ拾いボランティア ブルースカイ代表 山元 隆 さん



昨年の7月、海開きの日に「ゴミ拾いボランティアブルースカイ」が久慈浜海岸で行った「ゴミ拾いイベント」には100名以上の人が参加した。時には日立市内の銀行のロビーで拾ったゴミの展示もしている。

山元さんがゴミ拾いを始めることになったのには、ちよつとドラマチックなストーリーがある。仕事の一つの節目をむかえた56歳のとき、忙しさから少し解放された今までやってこなかった何かにチャレンジしたいという思いがどんどん膨らんだ。絵、書道、色々浮かんできたが、まだ元気なうちに出来るものと考えて辿り着いたのがカヤックだった。憧れてはいたがなかなか手を出せなかったカヤック。舟を手に入れて久慈川、那珂川、遠く松島などにも出かけた。松島では自然の驚異と同時に復興の早さに驚き感動した。

ある日のこと河川敷の美しいせせらぎの中に鉄板とトンゲが捨ててあった。「遊ばせてもらっている自然に對する考え方が変わり感謝の気持ちもわいてきていたのでとても悲しい気持ちになりました。」持ち帰り物置



て、浅田による写真と参加者による文章で家族の物語を表現する。

★5月8日まで 10時〜18時(入場は17時30分まで)  
休館日は月曜日※ただし3/21(月・祝)は開館、3/22(火)休館 一般900円・高校生以下/70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方と付き添いの方1名無料 水戸芸術館 029・227・8111

【写真】《浅田家/消防士》(2006)



の中に置いていたトンゲの事を思い出させたのは、職場に行く道々に捨てられているタバコの吸殻。

禁煙の指導もしているという山元さん、以来トンゲと袋をバックの隅に仕舞い込んで吸殻やゴミを拾い始めた。気になりだしたゴミ拾いは職場から日常の散歩の時にも、毎週土曜日には6時に家を出て水海岸、大甕駅、そして久慈浜海岸へと歩く。そのうち一人でやっていたゴミ拾いに変化がおきた。一人増え、また一人。職場の仲間にも声をかけ出合いがまた仲間を増やした。毎週土曜日7時には久慈浜海岸にみんなが集まる。

アイディアを出し合い企画を練った海開きの日のごみ拾いイベントは、(公財)日本財団に団体登録をする帽子やTシャツ、トンゲなどが提供されると知り、「ゴミゼロ」の語呂合わせで5月30日に登録して行った。登録名が「ゴミ拾いボランティアブルースカイ」。

今年も開催する予定という山元さん。イベント名は「ゴミ拾いブルースリップブルーサンタin久慈浜」。  
「ゴミ拾いをする人を山元さんは美しい砂浜をつくる人」ビーチデザイナーと呼ぶ。